

文楽における連声

坂 本 清 恵

はじめに

「伝統芸能の伝承」の「音声」をどのように考えたらよいのか。「伝統芸能」の音声は、その芸能がいつごろ、どこで始まり、どこで伝承されたのが現在のあり方に関わる。伝統が長ければ長いほど、日常での発音と、伝承された発音との乖離が問題になる。否、音韻変化に合わせて新しい発音で演じる方法もあるのだから、乖離しない場合も想定できる。これは詞章について、初演のまま演じるのか、時代に合わせて詞章を変えてわかりやすいものにするのかと同様の問題ではある。しかし、音声面の変更は演者、観客とも気がつかないうちに徐々に進行し、やがて新しい形になっていく可能性がある。よしんば、変化に気がついて古い発音を残そうとしても、謡における才段長音開合の区別のように、努力虚しく区別がなくなってしまうものもある。

文楽における伝承音を考える上で、具体的な音声が「いつ」変わったのかを特定はしにくいのが、義太夫節の創始のころから、現代までに何が大阪では変わったのかを確認しておく。

十七世紀末ごろには、すでに「じぢずづ」の四つ仮名は二つ仮名

になり、才段長音の開合の区別、アウからの長音と、オウからの長音の区別はない。撥音、促音も独立性を持ち、連声なども起こらなくなっていた。ハ行も現在と同様で、「フ」以外は唇音ではなくなっていた。現代と異なるのは、合拗音「クワ」と直音「カ」との区別があった点、「せ・ぜ」を「シエ・ジエ」のように発音していた点である。

体系的な変化以外には、単語の語形にかかわる変化がみられる。まずは、清濁の問題である。「誰」が「タレ」から「ダレ」に、「北浜」が「キタバマ」から「キタハマ」になるなど、濁音化、清音化という両方向の変化例がみられる。また、「問屋」が「トイヤ」から「トンヤ」に、「借る」は五段活用から一段活用へ変わったことにより、促音便「借って」から非音便「借りて」になるなどの個別の変化もある。

しかし、先に挙げた義太夫節創始時にはすでに変化が終了していたにもかかわらず、連声などは現行の義太夫節にも聞くことがある。十七世紀末当時すでに使わなくなっていた発音をなぜ取り入れ、伝承するのか。ここでは義太夫節の発音における古い音声の現れ方について分析を行い、音声の伝承を探ってみる。人物造型に大きく関

与するアクセントについては扱わず、今回は連声と連声に關係する発音を中心に考察を行う。しかし、アクセント以外の古い発音についても、伝承したものなのかどうか、なぜそれを使うのかについて分析すると、人物造型のためである可能性を持っているように思う。

本稿では何が伝承音なのか、伝承をどう伝えるべきなのかの手掛かりの拠りどころとして『義太夫選集豊竹山城少掾』（平成一四年、ビクター伝統文化振興財団）の以下の語りについて現代語と異なる音声がどのように現れるかを概観する。山城少掾の語りが、現代の語りの一つのモデルであると考えられるからである。残された音声は一回のものであり、録音時以外には他の発音がなされていた可能性もあるが、いずれこれを基礎データとして、義太夫節録音資料の初期から、現代までの語りまで広げて検討して行ければと思う。すでに前稿で取り上げた作品もあるが、連声関連のまとめとして取り上げる。

〔絵本太功記 尼ヶ崎の段〕昭和六年十月発売『太十』と略す。

〔増補忠臣蔵 本蔵下屋敷の段〕昭和九年九月発売

〔本下』と略す。

〔義経千本桜 鮎屋の段〕昭和九年三月発売／

昭和二十九年十月放送『鮎屋』と略す。

〔御所桜堀川夜討 弁慶上使の段〕昭和八年録音

〔御所三』と略す。

〔一谷嫩軍記 熊谷陣屋の段〕昭和二十七年十月

〔陣屋』と略す。

〔源平布引滝 実盛物語の段〕昭和二十八年十月

〔実盛』と略す。

〔伊賀越道中双六 沼津の段〕昭和二十九年九月

〔沼津』と略す。

〔新版歌祭文 野崎村の段〕昭和五年六月『野崎』と略す。

〔近頃河原達引 堀川猿廻しの段〕昭和七年一月発売

〔堀川』と略す。

〔艶谷女舞衣 三勝半七酒屋の段〕昭和二十八年四月

〔酒屋』と略す。

用例は「語例（発音）」〈発話者〉「作品の略称」出現箇所（『義太夫選集豊竹山城少掾』詞章の頁）の順で示す。なお地の文での用例は〈地〉とした。

一 入声音・連声の効果

連声は漢字音における鼻音韻尾 m 、入声韻尾 t のあとに a 、 y 、 w 行音が続いた場合、 m 、 a 、 n 、 t 行に変わることを指すが、単語内の現象としては、江戸時代の大坂では特定語の読み癖として現れるだけである。

この連声および、 t 入声に母音が添加しない形が、室町末、江戸前期までは優れたものと評価されていた。²⁾

『日本大文典』には、「 t が先行する場合の第二則」として「 t (t) 又は、 ci ($ち$) の後に Va ($は$) が続く場合には、 v がないかのやうに、或いは又、 Va ($は$) が Ta ($た$) に変わるかのやうに、二つの t を以て発音される。例へば、 $Taxetta$ (タイシェッタ) $Xixetta$ (シシェッタ) $Comitta$ (コンニッタ) は $Taxetta$ (大切は) $Xixetta$ (師説は) $Connichua$ (今日は) である。尤もの二つの

方法は、両方とも発音され得る。」とある。連声と非連声が挙げられているが、非連声の場合、tが「チ」となる「今日は(コンニチワ)」は母音添加している。

また、『日葡辞書』には、入声音について、「Bechidan (別段)」の項に「Beidan」と言う方がまざる。また「Tonami」の項に「Butcuji. Melins. Butinio ionannu (仏事―ブツジとゴウよりもブツジと言う方がまざる―を管む)」とある。すでに開音節化しているが、母音を添加しない発音が雅なものであることを示している。連声形、非連声形のどちらにも発音されるということになり、連声の形も優れた語形とされていたであろう。

また、安原貞室『かたこと』慶安三(一六五〇)年にも、連声を「よし」とした評価がみられる。「又仁王経(にんわうきやう)を。にんなうきやうとよみ本院(ほんあん)をほんにん。文屋康秀(ふんやのやすひで)をふんにやなど、いふは。連声(れんじやう)とてよきことばなり。」「けんよなれとも連声(れんじやう)にてけんによとよむがよし」以上のように『かたこと』では撥音に母音が続く場合の例を挙げて、優れた語形とする。

以下、義太夫節のどのようなところに連声が現れるのかを確認する。

二 撥音系連声

撥音系の連声は、現代でも撥音の独立性が低い鹿児島方言などで聞かれる現象ではあるが、義太夫節では撥音が独立して発音されるにもかかわらず、ほぼ例外なく現れる。時代物と世話物の別、発話者の身分、性別、年齢、職業によって出現の仕方が異なることもな

い。字音語に限らず、和語の撥音に母音が続く場合にも連声の形で現れる。丸本には記譜されることはなく、床本に注記される場合もあるようだが、「ん」に続く「は・を」は「ナ・ノ」と発音することになっているのである。¹³⁾

義太夫節の隆盛期の謡伝書である『音曲玉淵集』享保十二年(一七二七)刊行を参考に連声を探ることにする。『音曲玉淵集』巻一には次のように示されている。用例は略す。

一 はね字よりうつりやうの事

訓の時も是に准して唱ふへし

○ あい う ゑ を

な に ぬ ね の ト唱フ

○ わ ゐ う ゑ を

な に ぬ ね の ト唱フ

な に ぬ ね の ト唱フ

ニエトモ

○ や い ゆ え よ

ニヤ ニ ニユ ニエトモ ト唱フ

連声は字音語内の現象であるが「訓の時も是に准して唱ふへし」

のとおり、義太夫節では、字音語、和語の語末の撥音から助詞の「は・を」に続く場合にもみられる。『音曲玉淵集』では、「ゑ」がアワ行の字として扱われ、「お」がないが、「エ」が[je]であったことを反映して「ネ」と「ニエ」が示されている。ヤ行が連声したときにも拗音が示されている。義太夫節は謡を音曲として取り込んだだ

けでなく、音声的な影響も大きいのだろうが、義太夫節でも連声形に拗音が現れるのであろうか。

以下、字音語内、字音語から助詞などに続く場合、接頭語「おん」に続く和語、和語から助詞に続く場合に分けて用例を整理しておく。

【二一】字音語内の連声例

【連声例】

後接「ア」「恩愛(オンナイ)」「地」『野崎』113・「三悪道(サンナクドー)」「地」『沼津』102

後接「イ」「延引(エンニン)」「義経」『陣屋』84・「三位惟盛(サンミコレモリ)」「弥左衛門」『鮎屋』59・「三位惟盛(サンミコレモリ)」「権太」『鮎屋』59・「三位中将(サンミチュウジョー)」「若葉の内侍」『鮎屋』57・「新院(シンニン)」「実盛」『実盛』90・「日本一の(ニッポンニチノ)」「実盛」『実盛』94

後接「エ」「因縁(インネン)」「久作」『野崎』110・「因縁(インネン)」「惟盛」『鮎屋』61・「善右衛門を(ゼンネモンオ)」「半兵衛」『酒屋』129・「善右衛門を(ゼンネモンオ)」「宗岸」『酒屋』130・「善右衛門を(ゼンネモンノ)」「十内」『酒屋』131・「善右衛門は(ゼンネモンナ)」「十内」『酒屋』131・「輪廻(リンネ)」「お園」『酒屋』128・「輪廻(リンネ)」「地」『太十』41・「輪廻(リンネ)」「惟盛」『鮎屋』62

後接「オ」「天王山(テンノウザン)」「光秀」『太十』42

【非連声例】

後接「エ」「三衣に(サンエニ)」「地」『太十』42・「三衣袋(サンエブクロ)」「地」『本下』49

後接「ヤ」「塩冶判官(エンヤハンクワン)」「番左衛門」『本下』46
連声例は、人名の「善右衛門」や「三悪道」「新院」「日本」を除き、連声形が読みとして定着している語である。

「エ」に続く場合の連声形には「ネ」の例のみで、「ニエ」と発音された例はない。『音曲玉淵集』では「輪廻」に「リンネ リンニ エトモ」とするが、拗音形は現れなかった。これについては八世竹本綱大夫の床本とした『文楽浄瑠璃集』(一九六五年、岩波書店)の凡例に

梅王丸(うめおうまる)・輪廻(りんね)……「ンめおうまる」「りんニエ」と発音するが、次第に使分けなくなったので、振仮名を「ンめ」「ニエ」としなかった。

とあり、古くは『音曲玉淵集』にあるような拗音の連声であったことがわかる。いつごろから、直音系の連声になったのかも確認する必要があろう。現在の能では、「ニエ」は宝生流の連声でしばしば用いられるという。伝統音楽では「エ」に中世頃の発音である[je]を用いることが多いため、その連声が「ニエ」であることに不思議はない⁽⁴⁾。しかし、謡の場合、他流儀で出現しないのは、「エ」が[e]から[e]へ変化したことに連動して止めたのであろう。義太夫節でも同様の変更をしているといえよう。

なお、「ヤ」に続く場合には「塩冶」を「エンニヤ」とするものではなかった⁽⁵⁾。

【二二】字音語+助詞などの連声例

【連声例】

後接「ア」「ご機嫌悪い(ゴキゲンナシイ)」「お園」『酒屋』129・「

人預かり(イチニンナズカリ)〈宗清『陣屋』86・感心あり(カ
ンシンナリ)〉(地)『陣屋』87・御遺恨ある(ゴイコンナル)〈番
左衛門『本下』48・御対面遊ばせば(ゴタイメンナソバセバ)〈
相模『陣屋』83・ご覧遊ばして(ゴランナソバシ)〉(相模)『陣
屋』85・仁なり(あり)(シンナリ)〉(地)『本下』50

後接「は」『葵御前は(アオイゴゼンナ)〉(地)『実盛』94・一旦は(イツ
タンナ)〉(弥左衛門)『鮎屋』59・運は(ウンナ)〉(光秀)『太十』
42・縁は(エンナ)〉(久作)『野崎』112・縁は(エンナ)〉(地)
『御所三』68・旧恩は(キューオンナ)〉(実盛)『実盛』90・御
恩は(ゴオンナ)〉(お園)『酒屋』129・三人は(サンニンナ)〉(地)
『酒屋』128・三人は(サンニンナ)〉(地)『鮎屋』57・時分は(ジ
ブンナ)〉(地)『本下』46・四方天は(シホーテンナ)〉(十次郎)『太
十』41・三味線は(シャミセンナ)〉(鳥辺山詞章)『堀川』116・手
裏剣は(シユリケンナ)〉(地)『陣屋』85・所存は(ショゾンナ)〉
〈半兵衛妻)『酒屋』130・善右衛門は(ゼンネモンナ)〉(十内)『酒
屋』131・宗岸は(ソーガンナ)〉(地)『酒屋』126・大悪人は(ダ
イアクニンナ)〉(井浪)『本下』48・肉縁は(ニクエンナ)〉(宗
岸)『酒屋』127・日限は(ニチゲンナ)〉(十兵衛)『沼津』100・油
断は(ユタンナ)〉(弥左衛門)『鮎屋』55・料簡は(リョーケン
ナ)〉(花の井)『御所三』66

後接「を」『遺恨を(イコン)〉(光秀)『太十』40・一献を(イツ
コン)〉(熊谷)『陣屋』81・縁を(エン)〉(熊谷)『陣屋』
87・縁を(エン)〉(久作)『野崎』112・縁を(エン)〉(お染)
『野崎』113・縁を(エン)〉(地)『野崎』113・おしゅんを(オシユ
ン)〉(母)『堀川』117・恩を(オン)〉(宗清)『陣屋』87・恩

を(オン)〉(葵御前)『実盛』94・恩を(オン)〉(十兵衛)
『沼津』101・103・木偏を(キヘン)〉(若狭之助)『本下』48・金
銀を(キンギン)〉(番左衛門)『本下』47・金銀を(キンギン
)〉(若狭之助)『本下』47・金銀を(キンギン)〉(十兵衛)『沼
津』101・苦患を(クゲン)〉(熊谷)『陣屋』87・厚恩を(コ
オン)〉(惟盛)『鮎屋』55・御恩を(ゴオン)〉(弥左衛門)『鮎
屋』55・御恩を(ゴオン)〉(半兵衛)『酒屋』130・小きんを
(コキン)〉(地)『酒屋』131・御前を(ゴゼン)〉(地)『陣屋』
85・思案を(シアン)〉(地)『沼津』101・思案を(シアン)〉
(地)『堀川』118・祝言を(シユーゲン)〉(久作)『野崎』111・主
君を(シユクン)〉(祖母)『太十』39・成人を(セイジン)〉(瀬
尾)『実盛』93・栓を(セン)〉(地)『鮎屋』53・善右衛門を
(ゼンネモン)〉(十内)『酒屋』131・天を(テン)〉(地)『太
十』42・得心を(トクシン)〉(久松)『野崎』109・得心を(ト
クシン)〉(おしゅん)『堀川』118・内見は(ナイケンナ)〉(熊
谷)『陣屋』84・武門を(ブモン)〉(宗清)『陣屋』86・扁を
(ヘン)〉(若狭之助)『本下』48・法然を(ホーネン)〉(熊谷)
『陣屋』87・無心を(ムシン)〉(権太)『鮎屋』61・用金を(ヨ
キン)〉(十内)『酒屋』131

【非連声例】

後接「ヤ」『縁や(エンヤ)〉(地)『太十』38・不便や(フビンヤ)〉
(十次郎)『太十』38

後接「を」『善右衛門を(ゼンネモンオ)〉(半兵衛)『酒屋』129・善
右衛門を(ゼンネモンオ)〉(宗眼)『酒屋』130

撥音に助詞「は・を」が後接するときは、ほぼ連声で語られる。

例外は、「善右衛門を（ゼンネモンオ）」であるが、「善右（ゼンネ）を連声で発音したので忘れたのか。動詞「あそばす」「あり」に続く場合も同様である。助詞の「や」に続くときは、「字音語＋助詞」の場合と同様に「ニヤ」の形では現れない。

【二一三】接頭語「おん」＋和語の連声例

【連声例】

後接「ア・ワ」「御諦め（オンナキラメ）」〈熊谷〕『陣屋』82・御諦め（オンナキラメ）」〈伝兵衛〕『堀川』121・御別れ（オンナカレ）」〈宗清〕『陣屋』86

後接「イ」「御出あり（オンニデ）」〈熊谷〕『陣屋』81

後接「オ」「御仰せ（オンノーセ）」〈本藏〕『本下』48・御仰せ（オンノーセ）」〈弁慶〕『御所三』65

【非連声例】

後接「ア」「御有様（オンアリサマ）」〈地〕『本下』49

後接「ユ」「御行方（オンユクエ）」〈弥左衛門〕『鯨屋』55・御許し（オンユルシ）」〈お園〕『酒屋』129

接頭語に続く母音はおおよそが連声を起しているが、「ゆ」に続く場合は「ニユ」とはならない。

【二一四】和語＋助詞の連声例

【連声例】

後接「は」「兄様は（アニサンナ）」〈よね〕『沼津』102・「久作さんは（キューサクサンナ）」〈お染〕『野崎』107・「こな様は（コナサンナ）」〈十兵衛〕『沼津』101・「半七様は（ハンシツツアンナ）」〈お

園〕『酒屋』129

後接「を」「母様を（カカサンノ）」〈太郎吉〕『実盛』91

和語の撥音に助詞の「は・を」が続く場合も例外なく連声で語られる。

三 「チ・ツ」の母音脱落

促音系連声は本来、漢字音のt入声に母音が続く場合に起こるが、「チ・ツ」で終わる和語が母音脱落し、促音化して母音に続く場合にも現れる。これが「連声もどき」ということになる。しかし、「チ・ツ」で終わる和語が鼻音に続く場合に、促音化あるいは鼻音化が規則的に現れるわけではなく、撥音系連声と異なり、ごく稀にしか聞かざることができない。しかし、それがかえって大変耳に残ることになる。この場合、音声による人物造型が工夫されている可能性がある。『音曲玉淵集』一に「つめ字よりうつりやうの事」として記述されたt入声であったものが母音に連接する場合の促音化、鼻音化の説明を、用例を除いてまとめる。まず、母音、半母音については連声を説明する。

- あい ちう ちえ を
- チヤトモ チエトモ ト唱フ
- わはもた二通ス

- やい ゆ え よ
- チヤ チユ チエ チヨ ト唱フ

「あ」に続く場合が「タ」のほかに「チャ」となる例としては

「二握」^{ニグサ}が挙げられているが、次項にア行に続く場合がタ行になるのではなく、ナ行の拗音になる解説もある。これは「半はねの心」とあるように促音が鼻音的に発音された名残りであると考えられる。

一 ツメ字を吞みてあいうゑをへ移るは半はねの心なり

○ あ い う ゑ を あいうゑをト
スワ ニ スウ ヌエ スラ なにぬねのトの間に唱ふ
是はなにぬねのノ拗音也

実悪 生滅々已 滋雲 庵室へ 念仏をも
アク シヤクマクニ シツカクシ アシラヌモ ヌブツヲ

母音、半母音以外の行に続く場合は、以下にまとめられる。

「半濁に唱ふ唇ヲ急ニ合せてはづむ也」ハ行

「舌を巻て唱ふ」ラ行

「ツメテうつる」カ行・サ行・タ行

「ツメ字を吞む」ガ行・ザ行・タ行・ナ行・バ行・マ行

かつては濁音の前に鼻音が存したため、ナ行・マ行を含め、鼻音に続く場合に「吞む」という鼻に抜く発音が示される⁶⁾。

ここでは、連声例だけでなく、母音添加せずに発音される可能性のある「ち・つ」について、字音語、和語の用例をみていく。字音語については、本来入声音であっても、各作品の初演当時の大坂では母音添加の形になっていたと思われる、むしろ母音脱落とするほうが適切であるが、分類にあたっては字音語の場合には、母音の添加無添加を用いる。

『音曲玉淵集』で「ツメテうつる」とされる無声子音「カ・サ・タ・ハ」行に続き促音化する字音語内の例は現代でも同様に発音さ

れるので取り挙げない。有声子音「ラ・ガ・ザ・ダ・ナ・バ・マ」行に続く場合を取り挙げる。

「三一二」字音語内

【母音無添加例】即滅無量罪（ソクメツムリョーザイ）〈熊谷〉『陣屋』87

【母音添加例】「出陣（シユツジン）」〈祖母〉『太十』39；「出陣の（シユツジンノ）」〈地〉『陣屋』86；「成仏成仏（ジョーブツジョーブツ）」〈平作〉『沼津』104

母音を添加した例が、現代語と同じ発音である。「出陣」は「シユツジン」とあり、もともとの入声韻尾に母音「ウ」が添加し、現代語と同じ発音で語られる。「出陣」は『日葡辞書』に「Xuejin」とあり、『音曲玉淵集』にも「吞」例として「出陣（シユツジン）」を挙げている。「シユツジン」で語られていた可能性があるが、古い発音を用いない例である。

「三一二」字音語＋助詞などの促音化・鼻音化

【母音無添加例】

後接「ト」「成仏と（ジョーブツト）」〈平作〉『沼津』101

後接「ノ」「英傑の（エイケツノ）」〈光秀〉『太十』40；執筆の（シヒツノ）〈熊谷〉『陣屋』84

【母音無添加連声例】

後接「は」「今日は（コンニツタ）」〈番左衛門〉『本下』46

後接「を」「時日を（ジジツト）」〈久吉〉『太十』42；「秘術を（ヒジュツト）」〈久吉〉『太十』42

【母音添加例】

後接「ガ・ゴ」骨柄(コツガラ)〈地〉『太十』42・乙声(オツゴエ)〈地〉『鮎屋』54

後接「シ」紛失した(フンジツシタ)〈所の者〉『実盛』91

後接「デ」「徹で(イッテツデ)〈お園〉『酒屋』126・「命日で(メ

イニチデ)〈平作〉『沼津』99

後接「ト」饑別と(センベツト)〈地〉『本下』49

後接「ナ」大切な(タイセツナイ)〈十兵衛〉『沼津』99・「大

切なら(タイセツナラ)〈十兵衛〉『沼津』103・「偏屈な(ヘンクツナ)〈半兵衛妻〉『酒屋』126・「利発な(リハツナ)〈十兵衛〉『沼津』99

後接「ニ」御親切に(ゴシンセツニ)〈平作〉『沼津』100・「大切に(タイセツニ)〈義経〉『陣屋』86

に(タイセツニ)〈義経〉『陣屋』86

後接「ノ」講説の(コーセツノ)〈若狭之助〉『本下』50・「後日

の(ゴニチノ)〈番左衛門〉『本下』48・「今日の(コンニチノ)〈実盛〉『実盛』90・「天罰の(テンバツノ)〈祖母〉『太十』40・「鉢

の(ハチノ)〈半兵衛〉『酒屋』126

後接「ハ」時節は(ジセツワ)〈番左衛門〉『本下』45・「第一は(ダイイチワ)〈地〉『野崎』107・「荷物は(ニモツワ)〈地〉『沼津』101

後接「モ」挨拶も(アイサツモ)〈地〉『野崎』107・「時節も(ジセツモ)〈権太〉『鮎屋』61

後接「ヤ」「一日や(イチニチヤ)〈およね〉『沼津』99

後接「を」念仏を(ネンブツオ)〈十兵衛〉『沼津』104・「今日を(コ

ンニチオ)〈弥左衛門〉『鮎屋』56

『日葡辞書』では以上の例のうち「チ」で終わる「命日・今日・後日・鉢・第一」は母音が添加しているが、「ツ」で終わる「骨柄・紛失・利発・親切・大切・天罰・挨拶・時節・念仏」などは母音が添加しない形で掲出されている。

義太夫節の場合、用例は少ないが「ツ・チ」ともに母音が脱落し、助詞の「と」に続く場合は促音としての発音になり、「の」に続く場合は同じ促音であっても、謡曲の「吞む」に近い鼻音化した発音に聞こえる。しかし、同様の条件でも促音化、鼻音化しない例の方が圧倒的に多い。

「今日は(コンニツタ)」については、『音曲玉淵集』にもこの用例がみられる。

○はもわとヨム所ニテハたト唱フ
今日者コトツク

義太夫節においては、「今日は」を「コンニツタ」で語るのは特別な場合である。義太夫節では「今日」に助詞「の・を」が後接しても「コンニツノ」「コンニツト」とならない。つまりは、「今日」単独で「コンニツ」であるわけではなく、「コンニツタ」という語形で取り入れたのである。

連声例もわずかで、母音を添加せずに促音、鼻音で語るかどうか、連声が使われるかどうか、音環境によるのではなく、どんな属性の人物か、どんな場面なのかによる。母音無添加、連声は女性を使うことはない。侍が使う例がほとんどで、使用も緊迫した場面、格式張った場面、威張ってみせるような場面が使われる。

連声例のうち仏教用語は侍以外でも使用するが、他は侍の使用で

ある。字音語の連声は『本下』で〈番左衛門〉、『太十』で〈久吉〉の語りに出現する。〈番右衛門〉は「今日(コニツタ)」以外の「時節(ジセツワ)」後日の(ゴニチノ)では連声や母音脱落がおこらない。(久吉)の場合は、(光秀)に對峙したときに「時日を(ジジツト)」「秘術を(ヒジユット)」で用いられている。堅苦しい場面ということになるか。

「三―三二」字音語の語末

【母音無添加例】「貞節(テイセツ)」「(地)」「御所三」69

【母音添加例】「一念弥陀仏(イチネンミダブツ)」「(熊谷)」「陣屋」

87・「一物(イチモツ)」「(地)」「沼津」101・「二徹(イツテツ)」「(地)」「実盛」

90・「軍卒(グンソツ)」「十次郎」『太十』40・「軍卒(グンソツ)」「(地)」「太十」42・「御挨拶(ゴアイサツ)」「(実盛)」「実盛」90・「今日(コンニチ)」「(若狭之助)」「本下」49・「正月(シヨウガチ)」「(お染母)」「野崎」113・「真実(シンジツ)」「(地)」「野崎」110・「大切(タイセツ)」「(十兵衛)」「沼津」103・「南無阿弥陀仏(ナムアマミダブツ)」「(お染)」「野崎」112・「分別(ランベツ)」「(権太)」「鮎屋」59

字音語の語末が、母音添加なしの形で、母音の無声化のように発音されるのは「貞節(テイセツ)」の一例で、他は本来の入声韻尾に母音を添加した形で出現している。

「三―三四」和語の母音脱落

促音系連声は、和語にもみられる。この現象は義太夫節特有のものではなく、現行の謡にも現れ、謡伝書に記述されている。謡伝書

においての促音系の「連声もどき」をみると、まずは和語のうち「チ・ツ」で終わる音節が母音を脱落し、[t]で発音される必要がある。例えば、『音曲玉淵集』一に次のような記述がみられる。

一訓の☐文字は専直に唱ふ又ツムルハ有吞て移はたま〜有也

本来ならば、訓の「つ」はそのまま発音されるのに、「つめて」促音化したり、たまたま鼻音的に「吞」んで発音されたりすることもあるとしている。訓読みで「つ」を含む語の発音を四種類に分類しているが、「つ」が母音を脱落させる場合とさせない場合にわかる。以下、『音曲玉淵集』の四分類について用例を確認する。

1、「まつ(松・待)・義経(ヨシツネ)・経正(ツネマサ)・磯打(イソウツ)・勝色(カツイロ)・何(イツ)・朽(クツル)・初音(ハツネ)・三(ミツ)・四(ヨツ)・日嗣(ヒツキ)・落(オツル)」「音曲玉淵集」について、「ケ様のたくひは直に唱ふ」とある。これらは「直」とあるように、文字のとおりに促音化することなく発音するということ意味なのであろう。さらに別項で次のようにも記述する。

一訓の内なぬねの☐へうつる前の☐の仮名吞やうに聞えぬやうにいふへし

○姑いつなれ 高野 やつの谷に
撰のりつね 松に

鼻音であるナ行音に「つ」が続くときには、「つ」が「吞」のような鼻的促音で実現しないように注意を促している。

【母音脱落連声例】

後接「は」〔命は(イノツタ)〕〔熊谷〕〔陣屋〕81・命は(イノツタ)〕

〔太郎〕〔御所三〕66・命は(イノツタ)〕〔梶原〕〔鮎屋〕59・内
は(ウツタ)〕〔熊谷〕〔陣屋〕84・後は(ノツタ)〕〔熊谷〕〔陣屋〕

84・後は(ノツタ)〕〔義経〕〔陣屋〕85

後接「を」〔命を(イノツト)〕〔若狭之助〕〔本下〕48・命を(イノツ
ト)〕〔地(本蔵)〕〔本下〕49

【母音非脱落例】

後接「カ・ガ」〔命が(イノチガ)〕〔十兵衛〕〔沼津〕103・久松が(ヒ
サマツガ)〕〔地〕〔野崎〕107・命が(イノチガ)〕〔おみつ〕〔野崎〕

111・松ヶ枝(マツガエ)〕〔地〕〔太十〕41・松影(マツカゲ)〕〔地〕

〔沼津〕98

後接「グ」〔命ぐらい(イノチグライ)〕〔権太〕〔鮎屋〕59

後接「ト」〔久松と(ヒサマツト)〕〔お染〕〔野崎〕107

後接「ニ」〔命に(イノチニ)〕〔久松〕〔野崎〕109・内に(ウチニ)〔権

太〕〔鮎屋〕61・内に(ウチニ)〕〔地〕〔沼津〕99・内に(ウチニ)〕

〔十兵衛〕〔沼津〕103・久松に(ヒサマツニ)〕〔お染〕〔野崎〕107

後接「ネ」〔義経(ヨシツネ)〕〔義経〕〔陣屋〕83・義経(ヨシツネ)〕〔地〕

〔陣屋〕84・義経公(ヨシツネコウ)〕〔花の井〕〔御所三〕66

後接「ノ」〔命の(イノチノ)〕〔おしゅん〕〔堀川〕121・命の(イ
ノチノ)〕〔半兵衛妻〕〔酒屋〕131・内の(ウチノ)〕〔義経〕〔陣屋〕

86

後接「は」〔命は(イノチワ)〕〔権太〕〔鮎屋〕59・内は(ウチワ)〕

〔弥左衛門〕〔鮎屋〕62・後は(ノチワ)〕〔権太〕〔鮎屋〕62

後接「へ」〔内へ(ウチエ)〕〔おみつ〕〔野崎〕107

高接「ヤ」〔命や(イノチヤ)〕〔熊谷〕〔陣屋〕82・内や(ウチヤ)〕

〔義経〕〔陣屋〕62

後接「を」〔命を(イノチオ)〕〔地〕〔沼津〕104・命を(イノチオ)〕

〔権太〕〔鮎屋〕61・62

後接なし〔命(イノチ)〕〔梶原〕〔鮎屋〕59・命(イノチ)〕〔惟盛〕

〔鮎屋〕62・命(イノチ)〕〔久作〕〔野崎〕111・命(イノチ)〕〔地〕

〔酒屋〕127・此奴(コイツ)〕〔梶原〕〔鮎屋〕58

『音曲玉淵集』に掲げられた「義経」「初音」については、「ツ」

の後接が「ネ」という鼻音であり、「吞」んで発音する3に注記さ

れていてもおかしくない。今回の資料には例がないが、「初音」に

ついては、「義経千本桜」「河連法眼館の段」に「初音の鼓」を「ハツ

ネノツズミ」のように「ツ」の母音脱落した例が聴かれ、さらに「吞

む」発音が聞かれることもある。この段には「狐」にも「吞む」発

音が聞かれる。

義太夫節の促音系連声は母音が脱落し、連声の形になるのである

が、「命は(イノツタ)」「命を(イノツト)」「後は(ノツタ)」のよ

うに語られることがある。字音語と異なり、「チ」の母音が脱落し

た例である。「命の」のように鼻音に続く場合には母音を脱落させ

て「イノッノ」のような「吞む」例になってもよさそうであるがそ

うはならない。

連声の使用者は「陣屋」〔義経〕が「後は(ノツタ)」、〔熊谷〕が

「命は(イノツタ)」「内は(ウツタ)」「後は(ノツタ)」であるが、

我が子小次郎の落命を話すときには、「命や捨てん」は「イノチヤ

ステン」と非連声形である。『御所三』〔太郎〕が「命は(イノツタ)」

である。『鮎屋』の〔梶原〕「命は(イノツタ)」、〔本下〕の〔若狭

之助)と(地(本蔵)「命を(イノット)」で出現する。和語の場合、極少数の語が連声形で使われている。

『陣屋』〈熊谷〉の例については四世津大夫は

「命はなき物」は、はつきり「いのちわ」とは言わずに、「いのつたなきもの」と、吞んでいます。この辺りの熊谷の心境は、とても複雑なんですよ。

のように「吞む」という術語を使い、心境による語り方であるという解釈をしている。

『鮎屋』〈梶原〉についても

「親の命はとられても」と言います所の「命は」は、「いのつた」と申します。もし、「今日は」とありましたら、やっぱり「こんにつた」と申しますね。謡曲なんかでは、こういった言い方がよく聞かれますけど、「さむらいことば」のつもりなんですよかね。

と促音系連声を「さむらいことば」ではないかとする⁽⁸⁾。

用例をみると、同じ人物でも、促音系連声が起こる場合と起こらない場合があり、その使用には心情的、場面的条件が加わるのであらう。

2、「謹(ツ、シンデ)・刺(アマツサヘ)・討立(ウツタテ)・つつ立・はつたと・能引(ヨツヒキ)・訴(ウツタヘ)・打って・取って・成って」『音曲玉淵集』について「かやうのたくひはツムル」とあるが、いわゆる促音便である。

【促音便例】

「刺え(アマツサエ)」〈熊谷〉『陣屋』81・云つは(イッパ)「熊

谷」『陣屋』81・云つば(イッパ)「弁慶」『御所三』65・「尋ねて(タツネテ)」〈九郎助〉『実盛』92・「尋ねて(タツネテ)」〈平作〉『沼津』102・「尋ねて(タツネテ)」〈弥左衛門〉『鮎屋』61・「尋ねられ(タツネラレ)」〈弥左衛門〉『鮎屋』61・「謹んで(ツツシンデ)」〈地〉『陣屋』84・「引組(ヒツクンデ)」〈弁慶〉『御所三』65・「引添(ヒツソウ)」〈弁慶〉『御所三』65・「一討と(ヒトウツト)」〈地〉『太十』39

用例は一般的な促音便を除いたものである。「刺」は「あまりさへ」が促音便化し「あまっさえ」になったもので、『天草版平家物語』に「amassive」の例がみられ、現代までに「あまっさえ」に変化したものである。〈熊谷〉の語りに例がみられる。「謹」は現代「つつしんで」と文字どおりに発音するが、中世は『日本大文典』に「Tuxinde」、『天草版伊曾保物語』『天草版平家物語』も同様の例があり、促音便であった。『陣屋』の〈地〉に例がみられる。『音曲玉淵集』編纂のころも「つつしんで」「あまっさえ」であり、現行義太夫節でも古い語形が現れる。

3、「山賤(ヤマカツ)・初月(ハツツキ)・千満殿(センミットノ)・木津川(コツカハ)・おそれつへうそ(ノム)』『音曲玉淵集』は「此分は訓にても吞て謡ふ」とある。「山賤・初月・千満殿・木津川・恐れつべうそ」を訓読みにもかかわらず「つ」を吞んで発音する例として取り上げている。

「山賤」は語末であるが、それ以外は「ツ」の後続音がそれぞれ「ヅ・ド・ガ・ベ」という破裂の有声音である。母音を脱落させてはいるが、促音便のようになったのではなく、語中の有声破裂音は

鼻音的要素があったため、「ツ」が母音を落として、鼻音的になっていたと考えられる。現行の語での「山賤」を「ヤマガツ」と「呑む」発音は伝承音といえそうである。今回は義太夫節の用例はなかった。

4、「嶋つ鳥・亀江谷(ヤツ)」「此つヲ吞て謡流モ有 直ニ諷ふも有」『音曲玉淵集』この例は、文字どおり発音する場合と、「呑む」場合があるという。「嶋つ鳥」は流儀により、破裂の有声音の「ド」が後続し「呑む」場合と、文字どおりに発音する場合があるということなのだろう。「亀江谷」は「山賤」同様の語末である。

【母音脱落例】

「出立の(シユッタツノ)〈熊谷〉『陣屋』81・「一つの(ヒトツノ)〈瀬尾〉『実盛』93・「一つの(フタツノ)〈弁慶〉『御所三』69・「一つの(フタツノ)〈地〉『御所三』69

【非母音脱落例】

「出立の(シユッタツノ)〈若狭之助〉『本下』50・「一つも(ヒトツモ)〈太郎〉『御所三』66・「二つあれど(フタツアレド)〈太郎〉『御所三』66

「出立」「二つ」が両形のある例である。「二つ」は同じ作品内で母音の有無で使い分けられている。この例からは、瀬尾や弁慶のような僧兵や侍には格式ばった脱落例を使っているとみられる。

四 おわりに

豊竹山城少掾の語りでは、撥音系連声は、字音語、和語にかからず、撥音が助詞「は・を」に続く場合にはほぼ例外なく連声が起こ

る。連声がスタンダードの語り方である。撥音から母音に連続するときの掛かり方の習慣ともいえそうである。

ただし、撥音系連声の音環境のうち、エとヤ行に続く場合には連声が起こらない場合もみられる。連声により、拗音「ニヤ」「ニユ」「ニエ」となるのを嫌った可能性があろう。現在、聞かれることがあってもいずれ衰微してしまっそうである。

促音系連声は、撥音系連声に比べるまでもなく出現率が低い。t入声であったものも母音添加している場合が多く、和語の母音を脱落させ、促音化して語られることも多くない。つまり、促音系連声や、入声音、語末が「チ・ツ」で終わる和語の母音脱落は特別な効果のために使用されていることになる。これは、一で挙げた『日葡辞書』や『かたこと』にみられた連声を非連声よりも優れたものとする意識とは異なる。

また、語では女性か、武士か、僧かなど位相による使い分けはなく、促音系連声や入声を後接音によって「ツメル」「呑む」とで伝承しているのは、記譜されてきたことにもよろう。義太夫節でも正本に記譜されていれば、もう少し多く現れたのかもしれないが、促音系連声については、「コンニッタ」「イノット」など極小数の限られた語句単位で取り込んだものである。

義太夫節では促音系連声は、まず女性は使用しない。多くが侍の使用であるが、切迫した場面、堅苦しい場面であるなど、あるいは特別な役柄などに限定して現れるものとできそうである。

以上をみると、文楽における連声の使用は、現在の狂言の取り入れ方に類似していることがわかる。狂言も撥音系連声は規則的であるが、促音系連声は単語による摂取とみられるからである。

今後、現存音声資料を広く調査し、音声伝承の実態を明らかにしたい。

注(1) 坂本清恵(二〇〇八)「近世語と文楽」『國文學 解釈と教材の研究』五三(一五)

(2) 遠藤邦基(二〇〇八)『読み癖注記の国語史研究』清文堂 参照。

(3) 『四世竹本津大夫芸談』(一九八六年、白水社)二〇〇頁、一〇五頁、一四九頁。

(4) 『謡曲集 下』(一九六三年、岩波書店)による。

(5) 二〇一二年十一月この「仮名手本忠臣蔵」では、「エンヤ」と「エンヤ」の例が聴かれた。

(6) 「呑む」は「含む」とも言われる。

(7) 人形浄瑠璃文楽名演集『義経千本桜』(二〇一〇年、NHKエンタープライズ)昭和五十九年四月 竹本織大夫・鶴澤燕三(五代) 演奏など。

多くが「狐詞」のために現れるか。

(8) 『文楽浄瑠璃集』(一九六五年、岩波書店)二〇〇頁にも「梶原が「いのツタ」と連声で言うのは武士だからで、町人の権太は「いのちは」と語ってこれと区別する。」とある。

(9) 「やまがつ(含)にて」と「含」を注記した例などがみられる。謡の伝承については別に検討をする。注4によれば、「山賤」は訓であるため、観世流では音訓に従い、呑むことを止めたようである。

受贈雑誌(一)

学習院大学国語国文学会誌	学習院大学国語国文学会
学習院大学大学院日本語日本文学	学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻
学大国文	大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座
香椎潟	福岡女子大学国文学会
金沢大学国語国文	金沢大学国語国文学会
岐阜聖徳学園大学国語国文学	岐阜聖徳学園大学国語国文学会
京都教育大学国文学誌	京都教育大学国文学会
京都語文	佛教大学国語国文学会
京都大学國文學論叢	京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室
金城日本語日本文化	金城学院大学日本語日本文化学会
近代	神戸大学「近代」発行会
近代文学研究	日本文学協会近代部会
近代文学試論	広島大学近代文学研究会
クロノス	京都橘大学女性歴史文化研究所
芸文研究	慶應義塾大学芸文学会
言語表現研究	兵庫教育大学言語表現学会
言語文化研究	聖徳大学大学院言語文学会